

# 教職大学院 Newsletter

# No. 45

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2012.07.23

## 実践研究福井ラウンドテーブル2012に参加して

文部科学省初等中等教育局教職員課長  
教員免許企画室 日向 信和

6月に行われたラウンドテーブルに1日目のみでしたが、参加する機会を得ました。全国から多くの教育関係者が参加し、教師教育改革に関する関心の高さを実感することができました。特に、グループ協議では、一人の参加者の悩みに対し、他の参加者が熱心に耳を傾け、悩みを共有し、解決に向け語り合う様子が印象的でした。10年以上にわたり継続的に取り組まれてきた中で、このような雰囲気が高まったものと考えます。関係者のこれまでのご努力に深く敬意を表します。

中央教育審議会における教員の資質能力の総合的な向上方策に関する検討も、特別部会での審議を終え、総会での審議に移りつつあります。今後は、総会での審議を踏まえ、学び続ける教員像の確立に向け、教員養成の修士レベル化をはじめとする諸施策を具体的にどのように実施するか、次期教育振興基本計画に盛り込むべき内容を含め検討していくことになります。

教員養成についての議論は、制度論が中心となる傾向が強いですが、これからは、教員に必要な力をどのように育成するか（「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」）の観点に立ち、教員養成教育の内容や方法を如何に充実していくかも

重要と考えます。6月に開催された教員の資質能力向上特別部会資料「審議の最終まとめ（案）」においても、「これからの教員養成は、学習科学、教科内容構成の研究の推進及びその成果の活用、経験知・暗黙知の一般化による理論や方法の開発など、学校現場での実践につながる教育学研究の成果に基づき行う必要がある」としています。

また、教員養成の修士レベル化を進めるに当たり、教員養成を担当する大学教員の養成も重要です。実務家教員については、自身が経験した学校現場での取組を理論化することができる基礎的な素養を学修する機会をどのように設けていくか、研究者教員については、教職課程担当教員となる前に、学校現場でのフィールドワークなど実践的な

### 内容

- 実践研究福井ラウンドテーブル2012  
サマーセッションに参加して (1)
- ラウンドテーブル特集 (2)
- スタッフ紹介 (16)
- 拠点校だより (18)
- 院生紹介 (24)
- 附属幼稚園公開研究会 (30)
- 日本教育方法学会の案内 (31)
- 学生募集スケジュール (32)

教育研究を経験できる取組をどのように進めるかが課題であると考えます。

福井大学教職大学院は、教育委員会との連携・協働のもと、学校現場を大学院の実習・学修の拠点とする方式により、校内研修と大学院での学びを高度に組み合わせて学校現場での課題解決に当たる取組を行い、大きな成果をあげています。また、同時に教育学系大学院の博士課程修了者等

に対し、学校現場でのフィールドワークなど実践的な教育研究を経験する機会を提供する取組も行っています。ラウンドテーブルを重ねることにより、全国の教育関係者に福井大学における取組の理解が深まりつつあると思われませんが、今後は更に、教育内容や方法に関する研究を深め、理論化し、全国の教育関係者と共有できるよう更なる取組を期待します。

## ラウンドテーブル特集

### 専門職として学び合コミュニティを培う

～1日目の話し合いの報告～



zone A / 愛育養護学校 後藤 陽

「愉しくて、清々しい」会場にいたときの感覚である。

いま日常の学校生活に戻り、振り返ってみても研究会に参加させていただいて、本当によかったというのが率直な感想である。そのように思えるのは、自分たちの学校での取り組みや自らの実践を振り返り、報告させてもらう中で多くの気づきがあったこと。そして、熱い情熱を持ちながら、自らの実践に取り組んでいる方々がこんなにもいるのだと多くの刺激を得られたことの2点が大きな理由である。

愛育では、子どもの下校後に全職員、実習生が

一緒になって、毎日1時間くらい、その日の子どもの活動について語り合うミーティングを持っている。お茶やお菓子を食べながらの和やかな雰囲気のものである。ミーティングでは、子どもはこんなふう感じていたんじゃないかなという捉えだけでなく、保育者自身の驚きや迷い、葛藤などについても語り合い、各自の思いを共有する大切な場になっている。もう30年以上このような形でミーティングを続けている。その実践を「教育的関わりのひとつとしてのミーティング」と題して、報告をさせていただいた。福井での研究会を前に、校内研究会を開き、日々のミーティングで

子どもの活動の意味について十分に話し合えているか、何について掘り下げて話し合っていたのかをスタッフ間で捉え直すことができた。また、僕らが学校の中で、子どもたちと交わし合っていることは何なのか、子どもたちの何を受け止めて何に込めているのかという愛育の保育における、核となることについても改めて考え直すことができたように思う。日常的に行っていることを位置づけ直す必要性を強く感じた。



福井では、会場に溢れる熱気と他校の先駆的な取り組みに触れて、気持ちがどんどん高揚していった。

印象深い言葉をノートからひろってみたい。  
 「自分が、いま生きている位置を俯瞰して視てみる“自らのマッピング”」  
 「子どもをリスペクトする 尊敬の視点“こんなにすごいところがあるんだよ”」  
 「物事を変えていく大きな力は、よそ者・若者・バカ者」  
 「今日ここで出会い、語り合った7人のネットワークこそ財産」

2日間で、多くの元気づけられる言葉に出会えたことは幸せであった。エキサイティングであり、かつ静かに心が満たされていくような高揚感と包容感でいっぱいであった。今回の研究会で得た気づきを愛育のスタッフたちと共有し間いを深めていくなかで、日々子どもたちの取り組みにつなげていきたい。そして、子ども、保護者、地域をも巻き込んだ学びのコミュニティづくりに向けて熱意を持って励んでいきたいと思う。

愛育養護学校では、いつでも実習や見学を歓迎しています。子どもたちの活動をともに愉しみ、その表現の意味について語り合える機会を楽しみにしています。

続きは愛育で

## 繋がる！元気が出る！

### 「実践し省察するコミュニティ2012」に参加して

#### zone A / 金沢大学附属高等学校 山本 吉次

今回の「実践し省察するコミュニティ」に参加して得たものは数えきれない。まず第一に荒瀬先生、易先生から学校改革の重要な指針を得たことである。両先生ともに高校教育の共通性を担保する「コア」を重視することを指摘された。それを荒瀬先生は「社会人・職業人・市民としての能力・資質を育てること」と表現なさった。一方、易先生は「生きることを励ます」「人としての生き方、社会の在り方を学び、学び考え行動する力」と表現された。そして両先生ともに「教師間」「生徒間」「教師と生徒」のつながりを重視された。

私は、「総合的な学習の時間」（以下「総学」）と高校改革に対する関心からこの会に参加した。そ

の意味で、「総学」に意欲的に取り組んでいらっしゃる廣瀬志保先生（山梨県立塩山高校）と眺野大輔先生（富士市教育委員会）と交流できたことが今一つの大きな収穫であった。高等学校の「総学」は



全国的には必ずしも充実したものになっていない。しかし、いくつかの高校では先進的プログラムが実践されている。何よりもそのような人々と語り合えたことが私自身の元気となった。くわえて、「総学」こそが、学校が独自にデザインできるがゆえに高校改革の突破口となることを改めて確信できた。

セッションⅢのフォーラムも刺激的であった。その中で福井県立藤島高校の実践、学校選択教科「研究」の内容・方法・課題の事例報告があったが、とくに課題の中の、「実践の継続」は私どもの「総学」の課題とも共通するものであった。ここで一定の結論に至ったことは、「注入型」から「とも学び」型への授業観の転換の必要であった。

このセッションでは、いくつかのシンキング・ツールの紹介もあった。例えば「ジグソー」という

手法である。あるテーマに対してグループ討論し、その上で、グループを編制替えして再討論させて議論を深める手法である。様々な発展性のある手法であると考えられる。しかし、それに対して手法も大切であるが、課題を設定し、「わからないことを追究」することがより大切だという議論もあった。

「実践し省察するコミュニティ」への参加は一昨年に続き二度目の参加であった。前回は充実感を得たが、今回はなお一層内容の濃いものであった。とにかく多くの人と出会い、つながり、元気をいただいた。そして「容易に答えられない問い」にチャレンジする勇気をいただいた。企画なさった福井大学教職大学院のスタッフの方々に心から感謝したい。

なお、夜の懇親会でさらに元気が出たことは言うまでもない。

## zone B / 和歌山県教育センター学びの丘基本研修課 辻 克基

本年度、和歌山県教育委員会では、和歌山市教育委員会、和歌山大学とのこれまでの連携・協働の成果を生かして、初任者のさらなる力量アップのための初任者研修支援プログラムの共同開発に取り組んでいます。また、昨年度には、10年経験者研修において、初任者と10年経験者がともに育ち合える環境づくりを支援するとともに、協働性や同僚性を高めるミドルリーダーの育成をねらいとした研修内容の充実を図っているところです。

学校の教育力を継承し、学び続ける教員の育成のための仕組みづくりに向け、福井大学、福井県教育研究所、連携協力校等による実践からの学びを求めて「福井会議2012」に参加させていただきました。

Session I のポスターセッションでは、中教審「教員の資質能力の向上特別部会」、福井県教育研究所、福井大学教員免許状更新講習、福井県特別支援教育センター、嶺南教育事務所の各プレゼンテーションから、協働した教員養成の方向性への示唆を多くいただくことができました。Session II

のシンポジウムは、松木健一教授がコーディネーターを務め、「教師教育改革の構想と組織化」を



テーマに展開されました。中心となったのは、中央教育審議会・教員の資質能力の向上特別部会による審議のまとめと、今後とりまとめられる答申案のポイント、教員養成系学部・大学の将来についてでした。パネリストの村山紀昭先生(元北海道教育大学長)、加治佐哲也先生(兵庫教育大学長・日本教職大学院協会会長)の意見、コメンテーターの鍋島豊室長(文部科学省高等教育局大学振興課教員

養成企画室長)によるコメントを聞かせていただき、教職大学院がめざす教員養成への理解が深まり、SessionⅢの日向信和室長(文部科学省初等中等教育局教員免許企画室長)による基調報告と合わせて、これまでの教員養成改革の流れを整理することができました。また、SessionⅢのグループ協議では、岸野麻衣准教授(福井大学)をコーディネーターとして、「教師教育：教師教育改革と組織間協働」について問題提起がなされました。この中で、福井大学の現役大学院生によるインターンシップの実際や、教職大学院によって学校との関わり方が異なること、あるいは学校が求めている校内研修のあり方等について、各取組みの報告や質疑応答を通して深まりのある議論がおこなわれ

ました。

福井大学が取り組んできた「実践研究福井ラウンドテーブル」が広く認知され、その成果が着実に結実しつつあり、福井県の教員養成において、ますます重要な役割を担うものであると感じました。特に、学校拠点方式による勤務校での実務に応じた研究課題の設定、理論と実践の往還を可能にする取組や、省察するコミュニティの形成への着目など、多くの示唆をいただきました。

パラダイム転換による新たな教員養成のスタイルを提起している人たちと交わり、実りの多い会への参加となりましたことを感謝し、関係された皆様にお礼申し上げます。

## zone C / 福井市中央公民館 廣瀬 恵子

ラウンドテーブル3回目の参加です。今回も人・言葉・実践ともに素敵な出会いがあり、充実した時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

先ず最初は、附属小学校理科授業の実践報告を聴き合いました。3年生の理科の授業で「自然に学ぶ」をテーマに、子供たちが自然と出会い、クラスの輪を持って向き合い、かかわる成長の様子が語られました。子供たち自身で「3の2虫むし研究室」と名前を付けたことでクラス全体の学ぶ意欲が高まります。また仲間や専門家の話、意見を聴くことで、観察する眼やポイント、考え方が磨かれていきます。そして仲間の成長や良いところ、自分の成長や自分の良さに気付く「学びの宝箱」への単元へと発展していきます。公民館とは環境や学びの対象は違いますが、基軸テーマを具体的に据えて、人・事業を繋げ深める内容やかかわり方が、より活発で明るい組織へと発展していけるのではないかと共感いたしました。

今回は報告者が2名ということで、報告Ⅱの時間は報告者以外の取組みを聴き合いました。特に印

象に残ったのが養護学校インターン生の方が、「この先、こういう風に成長して欲しい。これが出来るようになってほしい。という思いを持って子供とかかわっていたけれど、視点を変えることにしました。その子を見る目を変える柔軟性を持ちたい…」と悩みながら見つけたその言葉に、なかなか出来ないことと深く感心いたしました。

最後にファシリテーターの先生をはじめ、同じ班の皆様、私のつたない報告を軽やかに聞き取り、広げてくださり新たな発見がたくさんありました。また次回も成長してお目にかかる日を楽しみにしています。



zone C / 豊郷町立豊日中学校 平田 輝子

私は外国人児童生徒の支援を16年続けてきて、児童生徒の努力だけではどうにもならないことが少なからずあることを知った。だからまわりにひとりでも多くの理解者を増やしたいと願ってきた。様々な分野の方が参加するラウンドテーブルにはそういうチャンスがあるのかもしれないと思って初めて参加した。



初日、実践交流の場では、福井大学の学生による探求ネットワークの活動に釘付けになった。人形劇・キャンプ・お料理・ふれあいフレンドクラブ・街角調査・伝統工芸・・・そのどれもが、外国人児童生徒のためにあればいいなと思っていた活動だったからだ。特にふれあいフレンドクラブは外国人児童生徒に置き換えて考えることもできる。こういう活動が学生の手によって行われていることを知り、地元の学生への期待感が高まった。

『持続可能なコミュニティへの問いを開く』のシンポジウムでは、大学生・大学院生・公民館主事がそれぞれの取り組みと、それらを今後どのように世代継承をして行くか、それぞれの文脈の中で語られた。対象に対してとても誠実に取り組み活動されていることが感動的でさえあった。それらを、制度化する、媒体を通すなどの工夫によって、世代継承をしていくことが大切と話された。私は自分の文脈に照らし合わせながらそれらを聞いているうちに、どうしてもふたつのことを投げかけたくなった。

『問いを深める』のところで私は話題を提供する側であったのでそれらをぶつけてみた。

地域住民と言ったとき、その中に外国人がちゃんとカウントされているか？ということ。

私の住む町では、子育てサークルの活動もお話会も活発に行われているが、そこに外国人の子どもを迎えているかというところではない。そのような子どもがいることはまるで見えないかのようである。またこのような状況であるから、世代継承というより横への認知がもっと必要であること。外国人家族は何か困ったことが起こっても、必要な情報を得ることができないことがあるし、どこにどんな社会資源があるかもわからない。

国民ではないが、地域住民であることを忘れてはならない。

生徒が2歳のとき、日本に出稼ぎに来ているお母さんに会いたくて、庭に穴を掘った。ブラジルで預かってくれている親戚から、お母さんはちょうどこの反対側にいると聞いた。地球の大きさなどわからないからお母さんに会えると思って毎日毎日穴を掘ったそうだ。深い穴の中で男の子が笑っている写真をグループのみんなで見ても、親子ともども幸せになってほしいと話し合った。

2日目、小学校の先生の授業実践報告を聞きながら、もしこのクラスに私が担当している外国人児童がいるとしたら、どんな支援をするだろうかと考えながら聞いた。『おにたのぼうし』のおにたと女の子の関係性は外国人児童とクラスメートの関係性と重なるから、是非考えさせたい教材ではあるが、なかなか難しいなと思った。

## zoneD / 札幌市立札幌大通高等学校 西野 功泰

福井ラウンドテーブルは、教育現場に起こる問題や課題に対し日々研鑽を積みながら解決の糸口を見つけようとしている方々と、多くの意見交換をすることが出来き、有意義で充実した時間を過ごすことが出来ました。

初日の荒瀬先生の特別講演では、今後の高校改革について拝聴しました。特に印象に残ったの



が「容易に答えられない問いに立ち向かっていく力」を育むという言葉です。商業教員として日々の教育実践を通じて思うことは、ビジネス社会の中で正解はないということです。生徒一人一人がビジネス社会で生き抜いていく力を育むには、知識や技術を教え込むだけではなく、まさに失敗を恐れず経験や体験を通して「容易に答えられない問いに立ち向かっていく力」を身につけさせることが重要であり、我々は生徒達の高校生活において、社会との距離を縮め、接続をする場と機会をできるだけ多く提供することが必要だと考えています。

SessionⅢでは、本校の新たな取り組み「学校と地域社会から学ぶ持続可能な発展的授業大通高校・中央幼稚園ミツバチプロジェクト」について報告させて頂きました。この取り組みはまだ始まったばかりで、実践報告というよりは、経過報告と今後の展望を聞いて頂く形となりました。本校は開校5年目の学校であり、北海道で

は初めての三部制、単位制を取り入れた新しいタイプの定時制高校です。今回報告した「ミツバチプロジェクト」は本校の特色を活かす為に多いに期待できるものだと考えています。

参加された方々と様々な意見交換を行い、このプロジェクトと一緒に進めていくメンバーと、打ち合わせをしているような錯覚さえ起こしてしまう貴重な時間を過ごすことが出来ました。

この報告に対するレスポンスの早さこそが、福井ラウンドテーブルの良さだと痛感しました。

同じテーブルからは福井市至民中学校の中谷忠裕先生の報告があり非常に参考になりました。至民中学校も校種は違いますが、本校と同じ開校5年目の学校であり、特色ある実践をされていて大変魅力的な学校でした。学校としてさまざまな取り組みや新たな挑戦をするときに、度々学校設立の理念を見直すというお話は共感しました。中谷先生はこれまでの学校の記録を1人の生徒にスポットを当てて報告してくださいました。

学校の教育活動を考える上で、学校の規模に違いがありますが、森をみて木、枝葉というような考え方を意識していました。しかし、学校全体を省察し軌道修正を考える為に、1人の生徒（枝葉）からも丁寧に学校の現状と進むべき方向をお考えになっている中谷先生に大変感銘を受けました。

今回のラウンドテーブルでは、多くの方々と情報を交換し、職場での実践に活かすことができる貴重な学びを深めることができました。

この余韻が冷めないうちに職場の同僚や生徒達に還元し、今以上に大通高校を魅力的でよりよい学校にしていきたいと考えています。

今回このような機会を与えてくださった皆様に厚く感謝申し上げます。

## 実践研究福井ラウンドテーブル

～2日目の話し合いの報告～



### 群馬県立あさひ養護学校 南雲 敏秀

私は、このラウンドテーブルに教職に就いてから参加させていただくようになり、今回で4回目となりました。この場をとおして、県外の方々とつながり、学び合えることを嬉しく思っています。

私は特別支援学校を実践の場としており、小学校や中学校、地域の学習を支える公民館等を実践の場としている方々と、会話の中で用いる言葉からして異なり、足場の違いを感じたものでした。しかし、実践の歩みを語り合い聞き合う、このような場が互いにとっての学びの場になるには、互いの実践の場や教育観等について、すり合わせがなされ、その上で‘共有’する点を探ることが重要であると知りました。‘共有’する点をひとつの拠り所とし、学び合いが生まれるように思います。日頃の実践においても同じことが言えます。子どもたちを目の前にし

て、互いの意見をすり合わせつつ‘共有’する点を見出し、学び合いを生んでいく必要があります。そのようにして考えると、このような機会が、そのひとつの範例であるように感じました。

また、自らの実践を省察する上でも外部の方々の実践や考えに触れることは重要です。私は、長いスパンで自らの実践を振り返り、その過程にある実践、省察、仮説、実践…のサイクルをつなぐために、文字にして整理をします。そこで気づくことの出来なかった視点に、ここで気づかされることがあります。所属や職種の異なる方々との交流をとおして新たな省察の視点が生まれ、それが自らの実践を深める足場となっています。今後もこのラウンドテーブルに参加したいと思います。

### 東京大学教育学部附属中等教育学校 大井 和彦

昨年の6月にも参加させていただきましたが、このラウンドテーブルの魅力は教員でない方々も入り、平等に話をする事ができることだと感じています。教育関係の学会にも度々出席します

が、このような良い意味で砕けた雰囲気にはなかなかありません。だからこそ、このようなスタイルで起こすことのできる「学び」があると思います。今回も私の所属したグループには、教員以外



に公民館の主事の方や学生の方がいらっしゃいました。その中で自分の教科である国語の拙い実践報告をしましたが、皆さんが私の思いに様々な質問をぶつけてくれました。それに答えていく形で私の中で常日頃に思っていることがまた再整理されていきました。また、別の報告をなさった方々もそれぞれのお立場からの悩みや葛藤を打ち明けながらも、何とか前進しようとするお姿を眩しいほどに感じられました。

共通して感じられたことは、よりよい社会生活が送られるために行われる「教育」とその手段と結果としての「社会性」という課題でした。学校であるとか地域であるとかの限定ではなく、中心

になって様々な「学び」を働きかけている方々が、働きかけられている対象の方々によって主体的に「学び」に取り組むことが行われるように、どう思いを致すかを考えていくことと、それをどのような時に「仕掛け」ることができるかを考えることがその効果にいかに関与を及ぼすかを考えるということでした。これは、私にとっては初心にかえるということであり、教員としての私の努力目標である「啐啄同時」を改めて胸に刻む機会となりました。ご尽力くださった関係諸氏に心より御礼申し上げます。

## 板橋区立赤塚第二中学校 椿 正明

初めてラウンドテーブルに参加させていただきました。3人の報告者の発表を聞くことができました。「自分から何かを投げかけてアプローチしないと子どもの心が動かない」と毎日子どもと向き合う中で自ら気づいたことを語られた養護学校のG先生。「苦労を重ねて職員や住民の意識を変えることができても、公民館の本来のあり方について考えていくスタート地点に立っただけ」と話された公民館の主事Yさん。教育実習で発見した子どもの「つぶやき」「疑問」を出発点に、「かかわり合いながら学び合い教え合う」という大きなテーマに意欲的に取り組んでいる大学生Kさん。どの報告も、常に課題を持って実践し、それをより深く追及していこうとするものでした。

ラウンドテーブルが目指していることは「地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけし、その省察をふまえて実践を編み直していく。そして、地域や職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。実践をより広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を共有することが、その後の実践への問

いの深まりを支える拠り所になる。」とあります。正直、私はこの意味が良くわかりませんでした。しかし、今回実際に参加してみて、その意味が理解できたような気がします。なぜならば、数年後に、今日報告をしてくれた人たちの実践がどう進化しているのか、どう発展しているのか、尋ねてみたい、と素直に思えたからです。そして何よりの収穫は、職種や分野の違う人たちが学び合う場を共有することで、自分自身の仕事にも大きな励みになったことです。ありがとうございました。



## 宛て先のある語り大切さと面白さ

今回のラウンドテーブルで、自分の今までの取り組みをたどり直し、ストーリーとして語ることを通して、他者と共有することの大切さを学ばせていただきました。ラウンドテーブルのすばらしい点は、伝える相手によって、話の視点が変わるところだと思います。自分が準備してきたお話は、どちらかという学校ベテランの教員を聞き手として想定したお話でした。初任者として赴任した教師が、熟達した教師達にどのように影響を受けながら、変化し、成長していくかをたどるストーリーです。「新人の教師が自分の殻を破り、成長する際に、周囲からどのような支援、指導が必要なのか」を伝えるつもりでした。しかし、いざ席についてみると、聞き手は学部生や院生、公民館の主事、准教授といった面々で、純粋な意味での教員はいません。急いで語り視点を、「新人の教師がどのようにすれば周囲から支

## 埼玉県立新座高等学校 吉田 友樹

援、指導をしてもらえるか」という風に変更しました。聞く相手が存在することにより、話の視点が変わり、準備したときには気づくことができなかった自分の考えに出会うことができました。さらに自分の取り組みに対する理解が深まったように思います。

私は4月から一年生の担任をしています。生徒指導や問題行動が頻発し、即時的な対応に追われる日々を過ごしています。教師は多忙になればなるほど、長期的な視点で物事を捉えることができなくなり、見通しを失い、無力感にうちひしがれていきます。しかし、そのような毎日の中で、自分の取り組みを振り返り、立ち位置を再び確認し、フィードバックをいただくことで、初心を思い出し、これから向かうべき道が見えてきたように思います。ありがとうございました。

# ラウンドテーブルを振り返って

教職専門性開発コース2年／福井大学教育地域科学部附属中学校

## 河野 紘典

今回のラウンドテーブルを振り返る際に昨年のラウンドテーブルの時の自分自身と比較し、この一年間でどのように変容があり、また今回のラウンドテーブルで何を学んだのかを考えることにしました。

昨年6月のラウンドテーブルは、インターンシップ先の附属中学校にて授業実践を翌日に控えた状態で参加していました。そのため、どのようにしたらいい授業を行うことができるのか答えを求めて参加していました。そして、現在、私は授業研究に重きをおいて2年目の学びをスタートしています。昨年と同様今回のラウンドテーブルも「いい授業」をするためにどうしたらいいのかを探りたいという目的を持って参加し、新しい視点

を得ることができました。それは「いい授業」を作り続けるための協働体制という視点です。昨年度のラウンドテーブルは個人の授業づくりについての学びがありましたが、今回は協働した授業づくりという視点を学ぶことができました。特に



「学び合う関係」「子どもの姿で語る」という2つの大切さを実感しました。

今回のラウンドテーブルに参加する前に、現在県外で5年目の教員をされている大学の先輩とお話をする機会がありました。その先輩は校内研究のために授業公開をされたのですが、授業後に管理職からA4用紙4枚に授業評価と改善点がびっしりと書かれたものを受け取り、「もう授業公開したくない。普段あんなに先生が見に来ないからあの日は子どもも緊張してたもん。」とおっしゃっていました。附属中学校では普段から授業公開という体制があるためにその先輩の話を聞いていて気の毒としか思っていませんでした。しかし、今回のラウンドテーブルの二日目、ある先生の実践報告の中で教師の協働関係について話されているのを聞いて、先輩が「もう授業公開したくない」と思うことは、学校の体制の問題だけでないと感じてきました。

その実践報告して下さった先生は、「子どもの姿で語る」「学び合う関係」を理解されており、授業を参観される時、子どもの姿に注目されているとおっしゃっていました。ただ、自分と同じ教科の授業を参観されるとついつい教材や教師の発問などに注目してしまい、授業者と「教える-教わる」の関係になってしまってもおっしゃっていました。このお話を聞いて、昨年インターンシップの中で行った授業実践後の先生方との振り返りを思い出し、私は「教える-教わる」の関係だけでなく「学び合う関係」でもあったことに気づきました。また、先輩が「もう授業公開したくない」と思う理由の背景には普段から授業公開されていない学校体制以外に学校内のコミュニティに「学び合う関係」「子どもの姿で語る」という視点がないことを理解することができました。

私は昨年インターンシップの中の授業実践で、うまく行かず落ち込んでいました。しかし、私はその先輩とは違い、授業を公開することに抵抗はなく、むしろ公開したいと思っています。それは授業の振り返りの際に必ず先生方は「勉強になったわ」「授業見せてくれて、ありがとう」と言って下さったことが大きいと思います。未熟者の私と教員生活の長い先生方を

比べたら良い授業が出来ないのは当然のことなのです。しかし、私なり一生懸命考え行った授業だからこそ、その先生方の一言はまたいい授業しようと次の意欲に繋がり、落ち込んでいる私に元気を与えて頂いたことを改めて実感しました。未熟者の私の授業でも参観者にとって何か得るものがあつたと思えると少し自信を取り戻す機会になっていたと、私なりに「学び合う関係」の意義を理解することができました。

また、教職大学院やインターンシップ先の附属中学校では授業の振り返りの際、「子どもの姿を語る」のが当たり前でした。そのため私は参観した際「子どもの姿を語る」必要性を理解しないまま、ただ周りに合わせていました。しかし、その意義についても理解することができました。先輩が管理職からもった改善点の用紙は決していけないものではなく、むしろ授業者である先輩の糧になるものだと思います。私自身も昨年の授業実践を振り返る際にメンター教諭に改善点や反省点は指導して頂きました。ただ、その際に必ず「子どもがこういう様子だったから」といって頂いていました。子どもの様子や子どもの見取りを語っていただくことによって、授業者が見取ることのできなかった子どもの世界を理解でき、次の授業をどうすればいいか考えるきっかけになっていました。そのため、今回のラウンドテーブルで私は教師主導の授業であっても、子ども主体の授業であっても、「子どもの姿を語る」ことが大切だと思いました。それは教師の発問や支援に対して子どもがどのように考え、表現していたのかを知ることによって授業者自身の力量向上に繋がり、授業者が次の授業をどうしたらいいか考えることができるという理解することができたからです。

今回のラウンドテーブルを終えてから同じコースの1年生の授業を参観し振り返る際に、「学び合う関係」「子どもの姿を語る」ことは大切にしながら語り合うようにしています。また、私がいい授業づくりをするために授業を公開することが必要だと思っていたのは、恵まれた環境でインターンシップを行うことができたことが大きいと実感し、改めて感謝の気持ちでいっぱいです。

## 高校改革のプロセスとは

スクールリーダー養成コース2年／啓新高等学校  
東 俊輝

今回のラウンドテーブル福井2012に参加させていただき、大変勉強になると同時に、啓新高等学校にとっていい意味での刺激があり、課題を再確認できたのではないかと思います。

本校には、有志のメンバーで構成する授業研究会というコミュニティがあり、今年度で4年目となります。生徒が主体的に参加する授業づくりを実践し、ひいては学校全体の発展、成長に寄与するということが基本的な目標にしてきました。また、メンバーの中から毎年一人ずつ、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学し、大学院での学びを授業改革、学校改革にも生かせるよう取り組んでいます。また福井大学教職大学院の研究拠点校として、大学院の先生方から教養をいただく機会も多くあります。

そのような経緯もあって、今回のラウンドテーブルにおいても、6月23日(1日目)のセッションⅠで啓新高等学校の取り組みをポスター発表させていただき、セッションⅢにおいては、「高校改革のプロセスを語る」と題して小グループで話し合いが行われるのに先立って、初めの10分程度ずつではありましたが、4校の取り組みが全体の前で語られました。その中に本校も加えていただき、発表の機会をいただけたことはとても光栄なことであったと思います。

24日(2日目)では小グループでお互いの実践が語り合われる中で、教職大学院スクールリーダーコースの2年生としては当然のことではありますが、実践の報告義務があり、100分間の時間をいただいて啓新高等学校の授業研究会の取り組みを

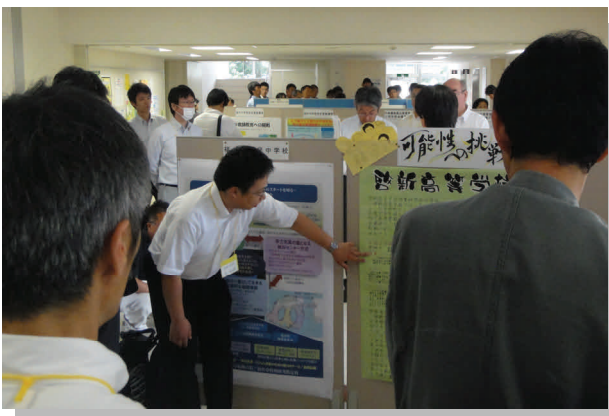
報告させていただきました。

今回は、1日目、2日目とも発表報告させていただくという機会が多く、全体として本校の取り組みや自分自身の取り組みが他の他校の先生方やさまざまな立場の方々のご質問やご意見をうかがう中で、自分たちだけではわからなかったり気づかなかったりした課題や問題点を発見し、また、課題や問題点として認識していたことを再確認させていただく機会となりました。

以下では、本校がセッションⅠ、セッションⅢ、ラウンドテーブルにて報告発表させていただいた大まかな内容を振り返りながら、そのとき感じたことを今一度考えてみたいと思います。

発表において、まずは本校の概要をお伝えし、次に、授業研究会の歩みについて報告させていただきました。授業研究会1年目はまさに手さぐり状態で、メンバーからも研究会の活動に具体性が見いだせない、主体的に参加できる雰囲気ではない等の不満が出たり、メンバーが大きく入れ替わったりと紆余曲折を重ねてきたこと、それでも研究会の2年目以降はさまざまな取り組みを行ってきたことに加え、3年目となる昨年度から授業研究会のメンバーを小グループに分け、クラス、生徒を直接的に見てより具体的に学びを語る機会を増やしたことで、研究会がいくぶんか活性化し、教員が相互に支え合い、語り合う場づくりというコミュニティとしての価値も生まれてきたように感じられていることも、合わせて報告させていただきました。

そのような報告発表をさせていただいて、さまざまなご意見をいただいた中でも、特にセッションⅢの「高校改革のプロセスを語る」の小グループ討議においての内容を述べさせていただくと、高等学校においては授業研究会を立ちあげたり、公開授業を頻繁に実施すること自体が小中学校に比べてかなり少ないという話が多く語られました。原因についてはさまざま挙げられましたが詳細はここでは割愛します。ともあれ、高等学校においても授業改革の運動はいくらでもできるはず



であるということ、その意味では本校の取り組みは有意義であるということも話の中に出していただくことができました。

しかし、一方で、良い取り組みを行っているはずなのにそれがなかなか全体に波及していかない、学校全体としての動きには程遠い、といった課題も大きく突きつけられているように感じます。授業研究会が立ちあげられて4年という期間は決して短くはなく、今後、それも近いうちに全体的な動きに広めていかなければ、コミュニティとしての鼓動が弱まる可能性もあると感じています。

それに関連して、セッションⅢで同じ小グループとなった他県の公立学校の先生のお話は大変興味深く感じました。その学校においては、以前は学級崩壊が頻発し、先生曰く「どうしようもない」学校であったということですが、授業形態を大きく変えることで生徒の授業参加意識が高まり、明らかに生徒の様子が変わったとのことで、本校ではいつまでも学校全体に波及していかないことに歯がゆさを感じず

にはいられませんでしたが。改革の学校全体へのスピーディーな波及には強いリーダーシップと、授業改革についての確固な哲学が必要と言えるかもしれません。その点において、本校の授業研究会はメンバーの年齢層が全体的に低く、責任の大きい役職に就いている教員もいないので、全体にリーダーシップをとりにくいと感じます。やはり、学校長を始め強力なリーダーシップを発揮できる立場の先生を動かせるだけの説得力ある活動にしていかなければならないと思います。

今回のラウンドテーブルにおいて、上記以外にも多くの皆様の貴重な実践談をうかがうことができ、たいへん実りあるものとなりました。特に私と同じグループになってくださった方々の実践について、この場において具体的に述べさせていただけなかったご無礼をお詫びいたしますとともに、啓新高等学校授業研究会のために様々なご意見やアドバイスを頂戴いたしましたことに、深く感謝申し上げます。

## スクールリーダー養成コース1年／灯明寺中学校 佐々木 徳之

今回のラウンドテーブルに参加し、シンポジウムやグループ協議を経て考えたことが二つあります。一つ目は大事なことはぶれないということ、もう一つは個別化のためのヒントはさまざまなところにあるということです。

まず荒瀬克己氏の講演を拝聴しました。中学校に勤務している私にとって高等教育改革を聞いたのは初めてであり、「いよいよ高校でも教育改革が始まるのだな」と思い、新鮮でした。学校の授業が変わりビルトアップしていけば入試が変わるという考えがある一方で、入試が変われば学校の授業が変わるのではないかという期待もあります。学校教育法第30条第2項で規定されている学力のうち、知識・技能を評価することはできても、活用力とされる思考力、判断力、表現力の評価は見えにくく、態度の客観的評価は私にはわかりません。しかし学力をつけたいことは誰もが望むことです。先日、彦根西高校の授業公開に参加しました。そこでは4人のグループ学習とコの字型の聴き合う形が

取り入れられていました。小学校の様でもありましたが、生徒達は好意的に受け止め、学びあっていました。今回のラウンドテーブルで語られた栃木県の小学校の先生もクラスに荒れの兆候が見られた時に、子どもに対応するためにはまず、教師自身が変わらないと、授業も学校も子どもも変わらないと校長先生のリーダーシップのもと、県内外の指導法の工夫改善例を導入したそうです。その時、少人数グループ学習の時間を多く取り、学び合い聴き合いながら一人ひとりのなかに学びのエピソードを作っていく学習スタイルをとり、立て直していったとの体験談を聴きました。ともに改革のためには(学校のココをよくしたい)というリーダーのぶれない思い姿勢が必要なのだと思いました。

2つ目はラウンドテーブルで違う校種の方々の語りを聞いたことは大きな収穫でした。例えば特別支援コーディネーターとの連携を持ち、一人ひとりに応じたスモールステップのカリキュラムを

組むことは面倒ですが、逆に生徒を落ち着かせていく近道になります。例えば姿勢が崩れがちな子に言葉だけで注意をしても治りませんが、ユニバーサルデザインの座布団を与えるだけで姿勢を保持できるようになったり、文字を認識できず分からないからやる気をなくしてしまった子には、写真や絵を使ったりするだけで意欲的に取り組んだりします。要はその子の自己教育力を信じて対策を練ればよいのです。そのためには教員間の協力が必要であり、そのことによって教員間にも同僚性が育つということでした。ただ問題点としてLDと判定されない子たちをどれだけピックアップできるかということが話題に上りました。これは私が勤務する中学校でも同じことで

す。真面目にノートはとるけれど思考していないので成績が伸びない『オートスキャン』の生徒をどう学ばせていくかが話題に上りました。同じく、人とかかわりについて携わるという立場ならば、学校も病院も老人ホームも同じです。そのあと発表された社会福祉法人の方の語りでも同じ人に関わる仕事、先ほどの特別支援教育の事例のように(何かしら参考になることがあるのではないか)という目で見ると大変刺激になりました。こうして2日間にわたる学びを終えると、自校内での協働をいかに進めるかが気になり出しました。広いアンテナを張って、今後の自分の研究の参考にしていこうと思いました。

## スクールリーダー養成コース1年／藤島中学校 渡辺 裕幸

今回のラウンドテーブルが3回目の参加となる。初めて参加したのは今年の6月。教職大学院を受験することが決まり、「一度参加してみると良いよ」と勧められたのがきっかけである。

我々教師の仕事は、毎日同じ仕事をこなしているわけではない。日々変化する生徒への対応や、生徒の興味・関心をいかに高め授業に参加させるかを毎時間勝負しながら行う授業など、その場その場での判断力・対応力が必要とされる。細かな視点でみるならば、「その時」「その場」での状況は違い対応にも違いが出てくるが、大きな視点からみれば、これまでの自分の経験や学びから得たものを頼りに対応していることに他ならない。私自身本当に厳しい毎日を過ごしており、新しい視点で物事を見つめたり、深く自分自身を振り返る時間は皆無に等しい。そのような中で、このラウンドテーブルに参加し、新しい視点を得る中で自分自身を省察する意義は非常に大きいと言える。

1日目に行われた「ポスターセッション」「問題提起」「テーマ別グループセッション」。ポスターセッション。細かい内容についてはここでは割愛するが、私は院生の立場で説明を聞いた。決められた短い時間の中で、必要な情報をいかに分かりやすく説明するか。「プレゼンテーション力向上」の研修の場を与えていただいた。生徒や保護者への簡潔で分かりやすい説明は教師に対する信頼へと

つながると常々考えているので、自分の目指すべきレベルを提示していただいたと捉え、今後精進していきたいと思う。

問題提起としての「教師教育改革の方向性」についてのシンポジウム。文科省教員養成企画室長をはじめ大学長2名および松木教授による意見交換。中教審の答申案として、教員免許状の修士レベル化が示された。私は、この動きについて非常に関心があり、ぜひ成案作成に関わられた先生方の生の声を聞きたいと思い参加した。今後の方向性について、とても勉強になった。また、教職大学院の学びについても、福井大学が行っている

「学校拠点方式」を採用している大学もあれば、兵庫教育大学のように大学での学びを重視する立場をとっている大学もあることを知り、興味が湧いた。それぞれのやり方に一長一短があるように思われる。福井大学教職大学院の「学校拠点方式」は、学校現場のことを最優先に考えていただいていると思う。私自身が教職大学院へ進学するにあたり、大学が教育委員会との連携・協力を進めていただいていることを強く感じるからだ。教育委員会の後押しがあるからこそ、頑張らなければと自分に喝を入れることができる。このことが福井大学教職大学院の強みではないだろうか。

テーマ別グループセッション。教員養成に携わっている大学や教育委員会の先生方の中に混じ

り自分が参加することは少し場違いかとも思ったが、このような機会は滅多にない、ぜひ生の声を聞きたい、と思い参加した。細かい内容については割愛するが、大学の先生方や教育委員会の指導主事の先生方が、教員養成および教員研修にあたり、いかに日々工夫され頭を悩まされているかを知ることができた。この機会がなければ知ることはなかったことだろう。貴重な経験をさせていただいた。

2日目は「グループセッション」。このグループセッションが日常の校務に忙殺されている自分にとって「栄養剤」となり、翌日からのエネルギーを与えてくれるものとなっている。そのため、毎回楽しみに参加している。これまでも、「ボランティアグループ代表」「公立夜間中学校教師」「公民館主事」「大学附属学校教師」「現役大学生」といった様々な職種の方々とグループ内で語り合う中で、新鮮な視点や価値観を得ることができ、また、自分の日々の取り組みと照らし合わせ振り返る絶好の機会としてきた。今回は欠席の方が出たので、急遽「発表者」の依頼をグループ内

でされた。あまりにも突然の事で、満足な準備ができないため失礼になるかとは思ったが、受けることにした。日常の取り組み等をグループのメンバーに聞いてもらい、いろいろな助言・感想をいただきたいと思ったからである。自分が描く「授業改革」について、教師としての視点（東大附属中等教育学校教師）、保護者としての視点（公民館主事）、授業を受ける側の視点（現役大学生）といった、様々な視点から意見をいただけたことは本当に貴重なことであった。発表して良かったと改めて思った。3月のラウンドテーブルでは、「院生」として、「長期実践報告」の「経過報告」という形で発表することになる。その時には、もっと充実した発表をしたいと思う。

この「ラウンドテーブル」は、今の私にとって欠かせないものとなっている。福井にいながら全国規模の話をリアルタイムで聞く機会が得られ、新しい視点・価値観を得ることができ、自分自身を省察する機会を設けることができるからだ。次のラウンドテーブルに向け、日々精進し、成長した自分で臨みたいと思う。

## 教職専門性開発コース1年／中藤小学校 瀧波 裕美

私は、今回初めてラウンドテーブルに参加させて頂いたのですが、振り返ってみると、今回のこの機会は、これからの自分に繋げていける本当に良き学びの場になったと感じています。中でも、私が、この二日間で考えさせられたのは、“子どもとつくる授業”と“(それぞれの職種での)共働”です。

一日目は、私自身関心の高かった富山県の堀川小学校の実践報告そして研究についてのお話をお聞きしました。実践報告については、翌日にイン



ターンシップ校での授業実践を控えていた私にとって、とても刺激的なものだったと感じています。私自身も、“教師の意図にただ子どもをはめ込んでいくような授業にはしたくない”と思いつつも、いざ自分の立てた授業案を振り返ってみると、“教師がここで出てもいいものか？このやり方で子どもの学びは深まるのか？”と感じる部分が多くあることに気づくことが出来ました。そして、お話して頂いたなかにあった“構想（子どもの行動を想定しながら、練り上げる）の主体は教師だが、一旦子どもに課題を提示してからの学びの主体は子ども”という言葉が心に響いてきました。子どもに出す前の構想の段階で、教師は多くの時間を費やしながらか授業づくりを行っていますが、一旦子どもたちに手放したら、学びの主体は子どもに移り、子どもと共に作り上げていくのだということを強く実感しました。ついつい口を出して、教師の思う方向に引きずり込みたくなってしまおうけれど、そうではなく、子どもと共

に考え、子どもの思考を大切にしながら学びを深めていかなければならないということを痛感しました。

また、堀川小学校の研究体制についても、学ぶべき点が多くあると感じました。堀川小学校の研究を続けていけるのは、教師全員が内を向いて切磋琢磨し合いながら互いに高め合っていることと、何より全教員が常に学ぶ姿勢を持っているからだと思います。堀川小学校の先生は、これを“厳しい仲良し”という言葉で表現されていました。授業公開に関しても、授業実践検討会に関しても、正直職務の9.5割は大変と話し、でも残りの0.5割があるから頑張れるということをおっしゃっていました。頑張れる形は、各先生方によって違っても、何より周りの同僚（仲間）の頑張っている姿を見ると自分も頑張ろうという思いになるということが語られました。

私はこの話をお聞きして共感し、一人ではいくら頑張っても一だけど、そこに誰か一人でも加わって二になれば、力が倍になり、さらに加わればまた大きな力となり、意欲を高められ

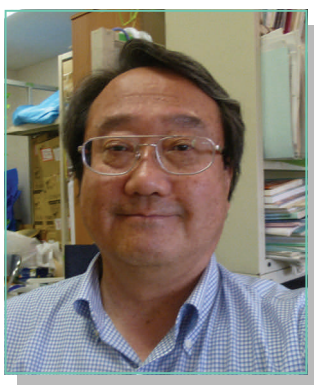
る。そうした意味でも、何かを一人で頑張ろうとするのではなく、みんなで共働していく姿勢というのは、すごく大事だなと感じました。

この共働に関しては、学校内だけでなく、異なる職種のなかでも、大切にしていかなければならないことだということも実感しました。

二日目のラウンドテーブルでは、自分の実践をもう一度捉え直し、意味付けしていくことの重要性を自分自身も話すなかで実感しました。自分自身が話しているなかで、自分が考えていたことについて再発見したり、再確認することが出来る場面があり、とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。日々の実践を語り合い、その語り合うなかでもう一度意味付けし直し、それをまた実践に活かしていくというサイクルの大切さというものを感じる機会となりました。

また、異なる職種の方からの話を聞くことで、新しい風を感じることもできたことも含めて、とても有意義な二日間だったと感じています。この経験を、これからの日々の実践につなげていきたいと思います。

## Staff 紹介



### 森 透 もり とおる

1985年9月に35歳で福井大学に着任して以来27年目となり、今までの自分自身の歩みを振り返ることの大切さを最近

強く感じていますので、本稿では27年間の歩みのエッセンスだけを簡単に振り返ることにして、自己紹介にかえさせていただきます。本格的な自身の歩みの省察は別の機会に行いたいと思います。

#### <教育史と教育実践史>

私の専門は日本教育史で、院生時代は明治期の

自由民権運動の教育史的意義を研究していましたが、福井大学に着任してからは大正・昭和期の自由教育の実践を取り上げ、特に三国町の三国尋常高等小学校（現・三国南小学校）の「自発教育」（三好得恵校長）に注目しました。それからは全国的に展開した自由で個性的な教育の実践を調査し、長野県師範学校附属小学校の「研究学級」（青年教師・淀川茂重）の総合学習の展開に魅せられました。この研究学級の実践が、現在の信州大学教育学部附属長野小学校や伊那小学校の総合学習の源流です。自分の中では、「教育実践の歴史」（教育実践史）の重要性に気づいた時期でした。



### < 附属学校園との関わり >

福井大学に赴任してから、特に附属小学校の実践に関心を持ち、当時は「冒険遠足」と命名していたと記憶していますが、低学年の子どもたちが自主的・自発的に計画を立てて、自分たちだけの力で「遠足」を実行しました。サポート役は担任の先生でしたが、その子どもたちのすさまじいエネルギーに魅せられ、ビデオカメラをもって学生と一緒に子どもたちの後を追っていました。このようにフィールドを附属小学校におくことで、私にとっては大正・昭和期の実践と現在の実践（子どもと教師の活動）をつなげることの大事さを学んだように思います。

### < 「子どもの悩み110番」 >

一方、当時は男子中学生の丸刈り校則問題や管理、教師の体罰など、様々な問題が発生していました。保護者の方々とも話す機会が多く、東京出身の私は、男子中学生に全員丸刈りが義務付けられている福井県の校則に違和感を覚えました。ある男子中学生が丸刈りではなく普通の髪型にしたいという望みを何とか支援したいと考えて、校則だけではなく学校教育のいろいろな課題を率直に話し合う場を設けました。このような活動を通して、広くいろいろな悩みを受け止める場として1993年度から「子どもの悩み110番」という教育相談活動を福井弁護士会と福井大学の教育実践センターと共催で始めました（この教育相談は現在65回目を数えます）。その後、丸刈り校則は福井県内の生徒会が立ち上がり、教師と保護者も巻き込んで校則を改正し、頭髮の自由化が実現しました。

### < ライフパートナーと探求ネットワーク >

1994年度からライフパートナー、1995年度から探求ネットワークを複数の教員と始めました。前者は松木先生、後者は寺岡先生、柳澤先生、それに私の3人で始めました。ライフパートナーは不登校の子どもたちのもとへ学生を派遣する制度

ですが、学生は真剣に子どもと向き合い信頼関係を構築して精神的なサポートができています。探求ネットワークは5月から12月までの長期にわたって学生と子どもたちで自主的・自発的に行う総合学習です。子どもにとっても学生にとっても、共に成長する場となっています。いまや350名近い規模に発展しています。

### < 学部と大学院教育の改革 >

以上の実践を通して、学部4年間と大学院2年間の在り方・カリキュラムを見直す必要を感じてきました。全国の教育学部を再編縮小してブロック化するという国の方針に反対して、私たちは地域に根ざした教師教育の在り方を提起した教授会見解を出しました。そして、大学院の中に、学校拠点で大学と学校が協働した関係構築を実現する「大学院学校改革実践研究コース」を2001年度に創設しました。この改革が2008年度に出発した教職大学院の基盤・前提となっています。

### < 教職大学院のいま >

教職大学院は全国に25校設置されていますが、学校をベースにした実践研究を丁寧に行っているのは、たぶん福井大学以外にはなかなか見出せないのではないかと考えています。しかし、日本の21世紀の教育改革のためには、広くネットワークを構築する必要があります。それぞれの大学や大学院が歴史的に構築してきた財産を踏まえつつ、お互いに排他的ではなく、連携・協働して日本の教育改革に力を合わせることを期待したいと思います。私は2006年度から2011年度までの6年間、教職大学院の拠点校である附属幼稚園長・附属特別支援学校長を務めました。楽しい6年間でした。その省察については『教師教育研究』第5号（2012年6月）をお読みくだされば幸いです（森透「教師の実践的力形成とマネジメントー附属学校園の管理職の役割ー」）。

# 拠点校 だより

## 丸岡南中学校

遠藤 正宏

本校は、平成18年4月に全国屈指のマンモス校であった丸岡中学校から分離新設した、開校7年目の新しい中学校です。県内初の教科センター方式を採用した学校で、他にもメディアスパイラル方式で建てられた斬新な校舎、全校生徒が一堂に会してとるクックチル方式の給食、そして異学年縦割り集団であるスクエア制を中心とした生徒会活動といった特色を持っています。



メディアセンター

すべての教科が専用教室とメディアセンターを持ち、教科特有の学習環境を作り出しています。メディアセンターとは各室に開かれたオープンスペースで、その教科に関する図書・プリント・資料・情報機器などが用意され、授業で使ったり、生徒が休み時間に自由に使ったりしています。また、各教科の教員が常駐し、生徒の相談や質問に気軽に応じ、生徒の自主的な学習を援助する場となっています。

メディアスパイラル方式とは、学校の中心である図書館を起点として、中庭を囲みながら立体的・連続的に多目的ホール、コンピューター室、ランチルームなどのオープンスペースや各教科のメディアセンターをらせん状につなげた方式のことです。廊下はすべて行き止まりのない設計になっており、単なる移動するための空間ではなく生徒の居場所であり、生徒同士や教師との出会い、コミュニケーションができる生活空間としての豊かさを生み出す場として活用できるようになっています。



多目的ホール



集団の中で自主性と自律性を育てることを目的に、スクエア制と呼ぶ異学年縦割り集団による活動を取り入れています。ホームルームの配置を学年をばらして5つにまとめ、それぞれ「花」「鳥」「風」「月」「宙」と名付けたスクエアを構成しています。年度初めにはレクレーションを中心とした「スクエアDAY」が設けられ、学年の壁のない楽しい1日を過ごしています。毎日の清掃や給食、体育祭や文化祭等の学校行事の他、特別

また、本校では、開校以来3年間を一区切りとして自主研究に取り組んできております。昨年度で2サイクル目が終了し、今年から研究主題「学び合う学校文化の創造」に取り組みはじめました。毎年の自主研究発表会では、県内外から多数の参観者の先生方にお越しいただき、研究授業を通して語り合うことで、大変ありがたい刺激をいただいております。本年度は新しい研究のスタートの年として、昨年同様「授業づくり」を中心に、「学び合い」に焦点をあてて研究・実践をすすめております。今年度は研究主任の私が、福井大学の教職大学院で学ばせていただいております。拠点校としての連携協力をはかっているところです。特に今年度も「教員同士の学び合い」という視点にも力を入れ、教職員同士の公開授業、事後協議会をスタートさせております。まだまだ拙い研究ではございますが、今年度も11月16日（金）に自主研究発表会を開催いたします。是非、今年度もたくさんの方々に参加いただき、ご指導いただき、ともに学び合いたいと願っています。どうぞよろしくお願いいたします。



## 至民中学校

鈴木 三千弥

### 進化、「新化」,「真価」する至民中学校合唱コンクール

昨年度末、一つの提案が出された。「来年の福井市連合音楽会には、合唱コンクールで優勝したクラスターが出演する。」正直驚いた。至民中学校は1,2,3学年が1クラスずつ集まりクラスターという小さな学校のような集団で生活している。合唱コンクールも5つのクラスターで競い合い、最優秀賞、優秀賞を決める。その最優秀クラスターが福井市連合音楽会に出演するのである。ここ10年、ほとんど3年生ばかりを担当してきたわたしには、「連音は中学3年生の発表の場である」という固定観念があり、個人的にも最初はこの意見には賛成できなかった。

4月になり、この提案は職員会議を通して決定となった。何かまだ釈然としないところがあったが進み出すより他なかった。保護者からも質問があった。教員の中でも、疑問視する声があった。「連音へ出たときに、3年生の完成されつつある声よ

りも1,2年生が入っていることで、音楽的にレベルが下がるのではないか?」「人数も約2/3になるので、文化会館で貧弱な歌に聞こえるのではないか?」などなど。しかし、変更にははっきりとした目的があった。それは、「至民中学校は普段からクラスターでの生活が中心で、合唱コンクールへの取り組みを通して、クラスターでの活動をさらに充実させ団結力を高める。」ためであった。

4月下旬から1ヶ月半に及ぶ練習が始まった。全クラスター共通の課題曲「My Own Road」と自由曲の2曲である。2曲歌うことも今年度の新しい取り組みである。わたしが所属するパーブルクラスターは順調な滑り出しだった。指揮者やピアニスト、クラスター長、歌プロジェクトの3年生数名からなる「合唱リーダー」が前に出て、どんどんリーダーシップをとって練習を進めていく。3年生が頼もしく思えた。

しかし、練習も2週目に入ると中だるみの気配が見え始めた。課題曲は何とかなりそうだが、自由曲「証」は相当手強い。我々教員も生徒と一緒に必死で練習するが音程、リズムなど難しすぎてなかなか歌えない。3年生の担任はクラス全員分のCDをコピーし3年生が1、2年生をリードしていけるように陰で支えた。しかし、なかなかうまくいかない。その焦りからか、合唱リーダーとクラスターのメンバーたちの間に何か「見えない溝」のようなものができはじめ、合唱練習が盛り上がってこなかった。



5月下旬、プレ発表会の日がやってきた。どのクラスターも大半の生徒は一生懸命取り組んでいるが、一部の生徒が乱れた言動で合唱コンクールの雰囲気壊している。今年の至民中学校の課題の一つでもある。いやな雰囲気でもプレ発表会が終わった。その後、生徒たちはクラスター集会で感想を言い合った。練習スタート時は「パープルが一番！」という噂もさやかれていたが、今日の結果に心は沈んでいた。生徒自身が自分たちの現在の仕上がりを一番よくわかっているのである。

次の日から、みんなの心に火がついた、と言いたところだが、合唱コンクールの練習はそう簡単にはいかない。指揮者のG君とHさん、伴奏者のTさんたちには「このままではいけない！」という焦りが見える。だが、その焦りが空回りするのである。ある日、G君がイライラしたまま練習に入り、厳しい言葉で指導をしていた。とうとうメンバーとの間に「はっきりと見える溝」を感じ、自分自身がキレて泣き出してしまったのである。G君は音

楽的センスだけではなく先を見通す力も持っている、このままでは合唱コンクールまで間に合わないということがはっきりとわかっているのである。しかし何よりも自分の焦りとメンバーの意識のズレから、ついつい口調が荒くなってしまった自分自身を一番責めていたのである。彼の心理が手に取るようにわかる合唱リーダーや担任、パープルクラスターの教員は、そんな彼を陰で支えた。

次の日から、G君は変わった。まわりの友達も肩の力が抜けた彼の変化に気づき、昼休み仲間たちがエリアに出て彼と一緒に歌い始めた。教科エリアのピアノの周りに3年生を中心に、一人また一人と集まり始めたのである。純粋に「歌いたいから歌う」。みんな笑顔である。穏やかな笑顔と笑いを交えながらの声かけで和やかな昼休みの練習が始まった。その様子にいち早く反応し参加したのが2年生女子である。2年生女子は音楽の授業でも普段の練習でも抜群のまとまりとハーモニーを響かせていた。その勢いに触発され、1、2年生の男子も集まりだした。数日後には自然発生的に始まった「笑顔の合唱練習」がこうして作られたのである。

合唱コンクールまであと数日。高くなる気温と比例するかのようにみんなの心も熱く燃えていった。そして、本番当日。たくさんの保護者や地域の方々に見ていただこうと、合唱コンクールを土曜日開催にした。これも新しい取り組みである。プレ発表会の時の「いやな雰囲気」は陰を潜め、どのクラスターも甲乙つけがたいすばらしい歌声を



披露した。充実した合唱コンクールとなった。予想を超えるたくさんの保護者や地域の方々も来てくださり、満足してくださったようである。結果は僅差でパープルクラスターが最優秀賞であったが、各クラスターの団結を目標に頑張ってきた2ヶ月間の取り組みが、すばらしい成果をもたらしてくれた。生徒を信じ、思い切って任せ、共に練習してきたものだけがわかる、クラスターそれぞれの満足感である。

福井市連合音楽会当日、クラスター長のI君は、「ここに来れなかった他のクラスターの分まで一

生懸命歌います。」とスピーチした。パープルクラスターの教員7人も全員ステージに上がり、生徒と共に緊張しながら歌った。そこには自信に満ち、一人ひとりの心をつなぎ合わせるように穏やかな笑顔で指揮を振るG君の姿と、カー杯歌うパープルクラスター90名がいた。

今回は学校紹介を物語風に書いてみました。このようにいろいろと課題を抱えながらも、日々進化、「新化」、「真価」する至民中学校をいつでも見に来てください。お待ちしております。



私の勤務する板橋区立赤塚第二中学校が福井大学教職大学院の拠点校になって、二年目になりました。そして、来年度より、板橋区で初めてになる、教科センター方式の校舎が完成し、生活が始まります。「教科センター方式」とは、従来のように教師が学級に移動して授業をするのではなく、すべての教科について教科ごとの専用の教室があり、生徒が移動する方式のことをいいます。生徒がホームベースという教室を中心にして、自分で時間を管理し、教科の教室に移動する仕組みになっています。資料によれば、受動的な学習ではなく、自分の意思で学習する力を養うことを目的としている建物の構造をしているため、「教科センター方式」は学習面で成果を挙げている例が多いようです。現在は、まだ校舎は改築中であり、プレハブ校舎で授業を行っておりますが、今の校舎でできることにしっかり取り組もうという

## 東京都板橋区立 赤塚第二中学校 名地 太輔

ことで、「探究的な学習」の推進、「言語活動」の充実、「協同的な学習」等の学習形態の工夫に力を入れて校内研究を進めています。23年度より、3年間共通の大目標として「生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫・改善」に取り組んでいます。

生徒同士の交流から生み出される学びのなかで、生徒に知識を獲得させる方法を考えていきます。教師から生徒に対しての一方型授業ではなく、生徒同士がお互いに自分の考えを持ち、話し合いを重ねた上で、生徒が自ら正しい答えを導き出せるようにしています。教師が考えるきっかけを適切に与えられるような授業を組み立て、

「言語活動」を活用した「問題解決型学習」を行えるようにするために、授業の研究に取り組んでいます。

私は、今年度で教職大学院二年生になりました。大学院生として福井に通わせていただき、そ

の間に、福井県内の教科センター方式の学校である至民中学校、丸岡南中学校、安居中学校を見学させていただきました。勤務する先生方とも交流させていただき、先生方の実践記録も読ませていただきました。板橋では「教科センター方式」は、活用によって能動的に学ぶ意識が芽生え、学習意欲が向上するという利点があり、導入されましたが、自分の中ではなかなか教科センター方式のイメージが掴めませんでした。それが、見学や交流する中で、少しずつですが、自分の中に教科センター方式の校舎での授業や生活に対してのイメージが出来上がってきました。私が読ませていただいた実践記録にありましたが、旧来の生活指導・部活指導・進路指導の「3つの指導」に加え、新たな指導体制や学校運営システムを構築していくことで、より大きい成果を上げられると書かれていました。私は、その、新たな指導体制の大きな一つの力ギが、授業であると考えています。授業観や学力観を変えることはそう簡単なことではありませんが、今後は、今まで受験やテストのためであった授業を、思考力、判断力、表現力、課題発見能力、問題解決能力などの社会において必要な能力を、自らが目的意識を持って獲得する、自らが問題に気がつく、といった『生徒の主体的な学び』を培うための授業へ変えていく必要があると思います。知識注入型学習から問題解決型学習へ、個人的な学習から協働的な学習への転換です。したがって、**教科指導と生活指導の一体化**ということを考えています。しかし、これは特別な取り組みということではないと思うのです。「**問題解決型学習**」は勉強だけではなく、生活においての問題解決能力育成を目指すために行うものです。「**協働的な学び**」とは、他者と学びの目的や、学びからえた気づきを共有し、協力し合いながら学習や問題の解決を行おうとする姿勢のことです。これらは、それぞれを行うことが目的ではなく、子どもの「**社会性**」や「**自立心**」を育てようとする根本的な目的のための手段です。そしてこれが、授業において生活指導に必要な能

力を育てようという授業改善の方向性になります。

また、今年度の新たな取り組みとして、来年度使用する教室の活用方法も見据えて、ICTの活用も研究テーマに組み入れています。

授業をみる視点においては、「**教師の教授法**」から「**生徒の学び**」に転換を図り、「生徒の学びの姿」を参観の点にしています。生徒は教師の問いかけにどのように反応したか、他者との協働的な学習活動ではどのような表情、気づきがあったか、教師の働きかけによってどうなったかなど、授業参観記録には生徒の学びが、記述されるようになっています。



以上の取り組みを行っていますが、まだまだ戸惑いも多くあります。生徒同士がお互い協力し合いながら、問題の解決を目指すという授業スタイル。「こんなやり方でやってもいいのかな」という不安もあります。例えば、それは今まであたりまえだと思ってきた自分の考える授業の「規律」が乱れるのではないかということです。生徒同士が授業中に会話をします。会話を全て把握することは不可能なので、これは大きな恐怖でした。また、効率を追求した「一方通行型の授業」に比べて非常に時間がかかります。それでも、問題解決型学習を積極的に取り入れていこうと思います。それは自分が担当する理科という教科は、過去の学者たちの問題解決型学習（基礎研究）の積み重ねで出来上がった学問だからです。理科にはびっ

たりなのでは、と自分では勝手に思っています。また、教科センターの設備面への対応も、考えています。新校舎の設備についての詳しい内容はまだ聞かされてはいませんが、電子黒板等の機器についても今後は、話題に上がってくるだろうし、活用する機会も増えると思います。そこで、電子黒板はまだ数が少ないので、プロジェクターを活用することにしています。板書の内容をあらかじめ作成しておいて、黒板に映し出す。そこにチョークで補足等を書き込めば、擬似電子黒板とし

て使うことができるし、板書の時間を短縮することができます。このように、ICTも研究中です。

本校の研究は、まだまだ歴史も浅く、個人的な悩みもたくさんありますが、研究が動き始めたというところに大きな価値を感じています。教員、生徒が一体となって、赤塚第二中学校の新しい歴史を作っていこうと思います。

## 豊小学校 中谷 幸子

「おはなしきいて。」「はい、どうぞ。」

1年生の朝は、子どもたちのこの元気な声からスタートします。朝の会で行われている「朝のスピーチ」では、スピーチするだけでなく質問タイム

「これで終わります。」  
「質問はないですか。」



を設け、友だちのスピーチを聞いてもっと知りたいことを質問するようにしています。一方的な発表ではなく、言葉によって双方向にやりとりができるようにすることで、朝のスピーチを通して自分のことを話す楽しさだけでなく、友だちが自分の話を聞いてくれる（そして、質問をしてくれる）

という喜びを実感することができます。この「伝える喜び」をコミュニケーション能力を育てる入門期である1年生において、最も大切にしています。人との関わり合いの中で「言葉を育てる」ことは、言語能力のみならず「心を育てる」ことにつながっていきます。国語科に限らず、いろいろな教育活動の中で、言葉と心がつながり合っていくような学習活動をこれからも工夫して取り入れていきたいと思っています。

このように、豊小学校では「共に学び合い、くらしに生かす子どもたち」という研究主題のもと、特に表現力・コミュニケーション能力の育成に学校全体で取り組んでいます。人との関わりの中で生まれる学びを、さらに、集団の中で高まる学びへと発展させていく中で、お互いが高め合い、認め合うことの大切さを実感させたいと考えています。そのためには、コミュニケーション能力や自己表現力を発達段階に応じて系統的に育成していくことが大切になってきます。そこで、教育活動全体を通して、子ども達の学びを高めていくために、次の3つの視点を研究の柱とし、さらに、それぞれの視点において具体的方策を明確に設定しています。

【視点①】

学びに見通しをもち、一人一人が主体的に  
学習に臨む授業

- ・ 主題探究型の単元構想図を作る。
- ・ 全員が学習に参加できる課題の在り方を検討する。

【視点②】

表現力・活用力を育てる言語活動の充実

- ・ 書くこと、話すこと・聞くことに関連、充実を図る。  
(表現力を育てるために)
- ・ 学習したことが生きるように生活へとつなぐ。  
(活用力を育てるために)

【視点③】

学習を活用し、伝え合う交流の場の設定

- ・ 一人一人の思いや考えが生きる伝え合いの場の設定
- ・ 学校生活の中で活用できる力を育てる場の設定

これら3つの視点が、相互に関連し合うことで、一人一人の力を高めつつ、集団の力を高めていくことをめざしています。豊小学校では、視点①にあるように互いの意見を練り合い、高め合いながら自分の考えを深めていけるような主題探究型の授業をめざしています。そのためには、視点②にあるそれぞれの教科の特性に応じた言語活動の充実を図ることが必要となります。また、視点②の一人一人の表現力・

活用力を育成することで、視点③にある伝え合う交流の場における話し合い活動や意見交流が充実してきます。豊小学校では学級の中だけでなく、学年集会や全校集会で感想交流の場を設けています。そこで



全校集会の後の感想交流

自信をもって自分の考えを発表する姿が多く見られるようになってきました。そのことから、表現力・コミュニケーション能力が着実に培われていることがうかがわれます。

豊小学校では、11月9日(金)に自主研究発表会を開催する予定です。子どもたちが互いに学び合い、高め合う姿が授業を通して見られるよう、今後さらに研究を進めていきます。ご参観くださり、忌憚のないご意見、ご助言をいただければ幸いです。

## 院 生 紹 介



木下 純子 きのした じゅんこ

はじめまして、今年度、福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースに入学しました、啓新高等学校の木下純子と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、簡単に自己紹介させていただきます。担当教科は国語です。勤務校では、生活文化科ファッションデザインコース2年生の担任をしています。

女子だけのクラスですが、元気あり、優しさあり、そして遅く、担任としては楽しみなクラスです。今後、様々な活動を通して来年度に控えている卒業制作発表会で、自分たちの成長をどのように表現してくれるか、わくわくしながら見守り、共に学び合っている毎日です。部活動はイラスト部を担当しています。6月のラウンドテーブルにおいて、啓新高等学校授業研究会のポスター発表に使ったイラストは、部員が描いてくれたものです。



啓新高校に赴任した当時は、剣道部の顧問として子どもたちとインターハイ出場を目指し、一緒に汗を流していました。平成7年に顧問を退き、自分も子育てをしながら教師として子どもたちと関わっていく中で、まず、生徒を理解し、個々を尊重しながら共に学び合っていこうという姿勢を持つようになりました。このゼロからのスタートが今、教職大学院で学ばせていただくことになった原点でもあるような気がします。切っ掛けとなったことは、勤務校の授業研究会において、大学院で学んでいる同僚の授業研究に対する熱意を感じたからです。高校も変化していかなければならない。有志が集うこの研究会には、教職大学院を卒業した先生方、現在学んでいる私たちも含めて、16名の先生が所属しています。大学院で様々な先生方との語りの中で学んだことを共有し合っ、授業実践、生徒指導に取り組んでいます。生徒が主体的に授

業に取り組むために様々な話し合いがなされ、知識を詰め込むだけの一方的なコミュニケーション不足の授業ではなく、生徒のことを理解し、生徒の目線で考え力を付けようという積極的な語り合いで盛り上がるようになりました。

入学してきた生徒が学校生活に魅力を感じ、目的意識を持ち、充実した高校生活を送り、社会に貢献できる人になって欲しいと願っています。しかし、中にはただ何となく一日を過ごし、授業に参加していないからわからない、わからないから授業が面白くない、と感じている子どもたちがいるのが現状です。この問題について、義務制での学びの変化、学校に求められていることが変わってきていることを私自身が学び、教職大学院で学ばせていただけることに感謝し、勤務校の授業研究会、若手の先生を支えていけるだけの力量を培っていきたいと思っています。



## 山本 毅 やまもと し の ぶ

この4月に福井大学教職大学院（スクールリーダー養成コース）に入学しました。と同時に、教職員定期異動で今年度から勤務校も変わり、まさに自分にとって2012年度は心機一転の一年の始まりとなりました。

今年赴任した高浜町立和田小学校（全校生徒120名、全7学級）では、3年生17名を担当しています。これまで中学校勤務が長かったため、慣れない小学生を相手に悪戦苦闘の日々を送っています。何より赴任したばかりの職場で、右も左も分からない状況です。校務分掌の役割・学級経営・授業準備・生徒指導など、何をするにも人より時間がかかり、それでも人並みのことができているというのが正直なところです。それでも何とか1学期の終わりまでたどり着くことができたのは、エネルギーな子どもたちからもらう元気と、職場の先生方の温かい支援があつてのこととつくづく感謝しています。

さて、この教職大学院の話は、前任校在籍時に校長先生からうかがいました。はじめは高浜町から大学までの往復5時間以上の通学時間、大学院での学びと学校勤務との両立など不安は多々あり

ましたが、それでも「自分の殻を破るよい機会」と捉えて入学を決めました。いわば刺激を求めての教職大学院入学でしたが、新しい勤務校での刺激とあいまって、現在はあまりある刺激の中で毎日を過ごしています。そのような中、これまで自分が持っていた学校観、教育観、授業観そして子ども観が次第に変わっていくのを実感しています。

教職大学院では、教育改革の展開をテーマに「授業研究を軸に据えた学校づくり」とそのための「教師集団の協働のあり方」を中心に学んでいます。大学院と連携する拠点校の取り組みに学んだり、院生同士の交流を通して各校の実践や課題を共有したりと、普段の学校勤務だけでは得られない学びがたくさんあります。それは、何かを教えてもらうというよりも、互いに語り合う中で自分の実践を振り返り、より質の高い取り組みを見出ししていくという「教員同士の学び合いの場」という感じです。

一方、本校では昨年度までこの教職大学院に在籍した先生によって「授業公開による教師の学び合い」・「子どもの学びを見取る授業研究」が進められています。校内研修会も小グループによるワークショップ形式で行われるなど、教師集団の協働が根付きつつあります。そのような本校で、

今年新しく赴任した担任は自分一人で、しかも最年少です。4月当初から他の先生の卓越した指導の様子を目の当たりにして、これまでにないほど「学ばなければやっていけない」と強く感じながらここまでできました。改めて、教職大学院での学びと現在の本校の研究体制のあり方は、自分にとってたいへんありがたいものと受け止めています。

今年4月の合同カンファレンスで、「社会の変化に伴い、授業の実施方法を含む学校教育のスタイル自体も変えていかなくてはいけないこと」、その

ためには「教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠であること」を学びました。今後は、本校教育目標「認め合い、つながり合う子どもの育成」を踏まえ、教職大学院で「学校としていかに学び合う授業を創造していくか」をテーマに研究を深めていきたいと考えています。教職大学院での学びを通して自分自身の殻を破り、成長し続けていけるよう努めるとともに、自分の成長が子どもの成長に、そして学校の前進につながるよう邁進していきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。



## 林 明宏 はやし あきひろ

みなさんこんにちは。今年度から教職大学院スクールリーダーコースでお世話になります越前町立朝日中学校の林明宏です。私は今年で教員生活26年目を迎えますが、自分はこれで勝負！と言えるものが何もないまま、中堅といわれる年齢になってしまいました。まさに歳だけとはった状態です。そんなこともあって、自分自身の「ベースアップ？」のために、家族全員の反対を押し切って（笑）、この制度で研修させていただくことにしました。

これまでに2回の合同カンファレンスと、ラウンドテーブルに参加させていただきましたが、他の院生の方々のすばらしい実践を聞き、大いに刺激になり満足しました。特に、ストレートコースの院生の方々の真摯な実践やこんな私の話を真剣に聞いてくれる姿勢には敬服しました。一方で、地に足のついた実践を順調にこなしておられる（と私には思えます）、M2の院生の方々のお話を聞くと、1年間でこれだけの貯金が自分にできるのだろうか？と不安にもなりました。

勤務校である朝日中学校は、福井平野南西端の、のどかな田園地帯にある中規模校です。学校の周辺の環境や、生徒の気質、職員規模から考えて、教師のやりたいことが思いっきりやれる可能性のある学校だと思えます。ここで私は、2学年

主任と生徒指導主事、そして理科教師という3つの顔を持っています。会議を主宰することが多い立場です。さして力があるわけではない私ですが、立場上様々な課題と直面することも多く、日々悩んでいます。学校現場での課題がそのまま、教職大学院での研究課題になると聞いています。せっかくの機会、大いにこのことを利用していきたいと思えます。

学校は、子どもに、それぞれの個性や適性に応じて、社会で活躍できる場を見つけさせ、そこで生涯にわたって活躍していくための下地を身につけさせるための機関だと思えます。子どもたちが、先行き不透明なこの時代を生き抜いていくためには、知徳体のバランスのとれた力を身につけることと、そのために自尊感情を育てることが不可欠だと考えます。そのために、まずは自分自身が、「何のために教師になったのか」「これからどんな教師を目指すのか」「そのために何をしていけばよいのか」などについて、これを機会に初心に返ってじっくりと考えたいと思えます。そして時には職場の同僚とともに、また時には院生の先生方とともに、協働研究していきながら、私自身が「学ぶ喜び」を実感し、子どもたちに伝えていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。



## 徳丸 郁子 とくまる いくこ

はじめまして。今年度、教職大学院スクールリーダー養成コースに入学させていただいた徳丸です。現在、福井東養護学校月見分校（以下、月見分校）に勤務しています。それ以前は、長く小学校に勤務しており、複式学級を経験したり、県内でも有数の大規模校で40人学級や低学年の学級の担任をしたり、特別支援学級を担当したりと、多くの貴重な体験をすることができました。

その中で、私が子どもたちに教えられ、常に大切にしていることは「目の前の子どもをみること」「子どもたちの言動の意味を読み取り、柔軟に関わること」です。診断名や障害名、または子どもたちの表面的な言動にとらわれず、目の前にいる子ども自身、そして、その子どもたちが表す言動の裏にある意味を推察し、読み取りながら関わることで、本来の子ども姿が見えるのではないかと考えています。

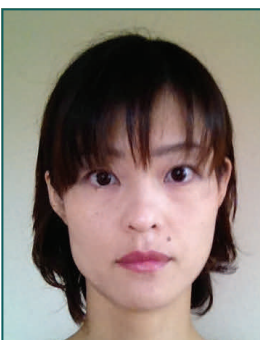
私が勤務する月見分校は、原則として福井赤十字病院で入院治療または通院治療中の子どもたちを対象としています。しかし近年、心身症などにより、対人関係の問題を抱えて不登校になり、医

療機関にかかりながら、通学している子どもたちが年々増加してきています。その月見分校で私が学んだことは、教師がチームを組んで子どもたちを支援し、複数の目で見えた子どもたちについての気づきや変化を日々語り合うということです。その語り合う中で、教師同士が学び合い、刺激し合い、子どもたちについての新しい発見が生まれ、自分の関わりをいろいろな視点から振り返ったり、次につながるヒントを得たりできました。

その経験から、教師同士が自由な意見交換を行うことで、お互いの実践、アイデア、気づきを共有し合い、学び合いが生まれ、それが子どもたちに有効な指導や支援、活発な実践を生み出すのではないかと考えました。

そこで、教職大学院では、学びをもたらすための教師の協働について、他校の実践を参考にしながら、具体的な内容と方法について深めていきたいと考えています。そして、月見分校教師全員で実践の共有化をはかり、日々の活動の中で主体的に議論したり、常に実践・検討を重ねたりして、お互いに刺激し、学び合いを深めながら取り組んでいきたいと考えています。

こんな私ですが、2年間どうぞよろしく申し上げます。



## 中道 優子 なかみち ゆうこ

今年度、教職大学院に入学した中道優子です。これから2年間お世話になります。よろしく申し上げます。

私は、新採用が養護学校配属で、その後中学校、そして現在の小学校とさまざまな校種に勤務してきました。その時々でたくさんのお会いがあり、また新たな発見がありました。その中でも、養護学校で過ごした5年間は私の教員生活の基礎となっているように感じています。忙しい日々を追われ、自分をふり返る余裕もなかった私が、そう感じ当時のことを思い出したのは、4月の合同カンファレンスで自分のことをふり

返って話す場面でのことでした。自分をふり返り、自分の思いを語り、相手の思いを聴く。ここまで自分を深くふり返ったり、自分の思いや経験を素直に話したり、相手の話を聴いたりしたことはありませんでした。だから、自分の考えをさらけ出すことに恥ずかしさをはじめは感じました。でも、周りの先生が温かく受け入れてくれ、その心地よい感覚が私を勇気づけてくれました。たった2日間だけなのに、先生方と今までずっと一緒にいたかのような連帯感を感じました。これがこれから続く教職大学院での学びなんだと痛感しました。

私は現在、鯖江市北部にある鳥羽小学校に勤務して7年目になります。ありがたいことにいろいろな学年を担当させていただき、それぞれの発達段

階における子どもたちの学びや成長をそばで見ることができました。そして今、高学年の担任を任せられ、私が感じるのは、小・中学校における学習内容の系統性に関する問題です。小学校で学んだ学習が中学校でどのように生かされているのか、学びをつなぐために教師は何ができるか教職大学院で考えていきたいと思ひます。また、協働の視点から他の先生方を巻き込んで、実践を積み重ねていきたいと思ひます。

教職大学院に入学して、いろいろな人と接する

機会が格段に増えました。今まで閉じた世界の中でしか物事を見聞きしなかった私が、異業種の人と知り合ったり、様々な立場の方の話を聞いたりすることで、自分のもつ世界が広がったように感じます。「異質なものと出会って自分の考えや見方が変わることを楽しさを味わうこと」「学んでいる自分を喜べる子を育てるためには、教師自身が学ぶ喜びを味わうこと」これからも学ぶ喜びを教職大学院の中で身をもって味わい、学ぶ喜びを味わえる子を教師として育てていきたいと思ひます。



## 富士 健一 ふじ けんいち

今年度、スクールリーダー養成コースに入学した富士健一です。高浜町内浦小中学校での7年を皮切りに、小浜第二中学校での7年を経て本校4年

目。「いつでも、どこでも、どんな時でも、最大限の努力をすれば夢は叶う」をモットーに、難しく遠い存在ほど近づいて「人」と正面から向き合い、熱く、深く、心に響く指導支援を日々心がけています。

本校は3年前、市の「授業力向上」研究指定第1期校として授業改善に本格的に取り組みました。家庭環境が複雑な児童や低学力の児童が多く難しい教育環境の中で研究副主任を拝命し、中学校から異動して右も左も分からない私は「子ども中心の授業」を具現化するために、前研究主任の後ろ姿を追いながら必死で実践を進めました。授業づくりや学級づくりを一から見直して臨んだ2年間の指定校研究は、「子ども中心のわかる楽しい授業」「雲浜式ワークショップ授業研究会」という財産に加えて、「子どもの落ち着きと学力の向上」「学校への信頼」「教師としての自信」という大きな成果をもたらしてくれました。

昨年、初めて研究主任を拝命し、子ども中心の授業づくりから、子ども中心の学校づくりへと研究の幅を広げようと意気込んでいたものの、指定校研究が終わった後の研究水準の維持発展や学校としての課題克服が本当に難しく、やることなすことがうまく行かずに堂々巡りしてしまう毎日で

した。指定校明けの年であるにもかかわらず自主研究発表会を含めた数々の重荷を個人に負わせた上に、「鯖街道体験学習」というビッグプロジェクトの継続や学校評価を教員全体で行う新たな取り組みを上乗せしていった結果、それらを巡る様々な葛藤、不満、負担感などが組織全体を覆ってしまいました。けれど、前進させることが使命であるという思いに駆られ続けた私は、様々な「人」の声に耳を傾けていくという謙虚な姿勢と、人と人がつながり合うことで生み出されるものの価値を忘れてしまっていたように思ひます。「組織」を「人」より優先して考えてしまっていたのです。

そんな自分自身を断ち切らせるきっかけとなったのが、今年3月に初めて参加し、実践発表させていただいたラウンドテーブルでした。地域や職種、年令の枠を超えて集う様々な立場の人との「自己を省察し、語り合うことによって生み出されるつながり」が、責任ある立場に立って凝り固まっていた私の頑なな心を溶かしてくれました。

人と人とのつながりの大切さを自覚し、「協働」する中で「個」を生かし成果を上げることのできる「組織」をコーディネートできる研究主任。教職大学院での2年間の学びによって考える機会を得た今、そんな新たな「自分探し」をしていきたいと思ひます。



## 野村 陽子 のむら あきこ

今年度スクールリーダー養成コースに入学し、早や3か月が経ちました。勤務する福井県特別支援教育センターは教職大学院の拠点校となっていることから、教職大学院は遠くない存在でしたが、実際に大学に通う中で「入ってみなくてはわからなかった」おもしろさを毎回感じています。私は採用が遅かったため、教師になってからは「とにかく目の前の子どもに向き合うことにじっくり取り組みたい」と思っていました。しかし、センターで各々が日々の実践に真摯に取り組むだけでなく、同僚と共に振り返りながらさらなる実践を積み重ねる姿を見る中で、「自分一人が、がむしゃらに取り組むだけではだめだ」と思うようになり、取り組んだことを共に振り返り、高め合っていく仲間の存在に目が向けられるようになりました。同時に、様々な経験や立場の教師が集まる組織としての職場を考えるようになりました。教職大学院では、様々な立場の先生方に出会い、その実践を自分の経験と重ねながらじっくりと深く聞くことができます。これまであまり考えてこなかった組織の中の自分について向き合っていくことになると覚悟していますが、今の自分

だからこそ、教職大学院での学びに意味を見い出せるのではないかと考えています。

さて、勤務先である福井県特別支援教育センターは、障害のある子どもたちや特別な教育的ニーズのある子どもたちにかかわる保護者や担任、園や学校及び地域を支える教育機関です。15人のスタッフで「園・学校支援」「保護者支援」「研修支援」「就学支援」の4つの事業を展開しています。現在、私は研修のを担当していますが、センターの事業のベースとなっているのは、相談業務だと常に感じています。所員一人一人が相談を担当する中で子どもと向き合い、園や学校の先生方や保護者とともに悩んだり学んだりすることが、センターの中で共有され、方策が練り合われ、またそれぞれの相談に出向く力となったり、ひいてはセンターのめざす方向性となったりします。研修事業においても同様で、その内容は一つ一つの教育相談の現場である園や学校から切り離しては考えられないものであり、研修者との協働と所員の協働性の中で形づくられています。

センターでは、かねてより所属校における研修者自身の課題解決を柱にした「拠点校方式」の実践的研修が進められています。教職大学院での私自身も同じ立場に身を置きながら、実践的研修の在り方を模索していきたいと思っています。



## 高木 誠 たかき まこと

今年度よりスクールリーダー養成コースでお世話になっております、高木誠です。教科は理科、ソフトボール部の顧問をしています。振り返れば、今までラッキーな教員生活です。部活動の顧問をしたいがために中学校・高校勤務を希望しました。その結果、これまでの教員生活18年間に高校勤務も3年間経験させていただきながら、15年間中学校に勤務しています。そのうち美浜中学校勤務は現在2期目の5年目。通算13年目に入りました。本校教職員の中では一番の古株になっております。そして本校ソフトボール

部をもたせていただいて、トータルで11年目。これまで、いろいろな方々に出会い、また支えられ、協力をしていただいて何とかやってきております。今年、教職大学院で勉強させていただくことになりましたが、一番の心配であった練習試合については、これまでのつながりの結果、他校の顧問の先生方に協力いただいて、数は少なくなりましたが、工夫しながら実施することができています。生徒・保護者・教職員・地域の方々・協会の方々の協力のもと、今の自分があります。日々感謝の念をもって、大学院での研修に励んでいきたいと思っています。

美浜中学校は美浜町の中心部に位置する、全校生徒251名の中規模校です。平成21年度に新校舎

に生まれ変わりましたが、荒れたり落ち着いたり  
の繰り返しの中、苦勞しながらも伝統の上に新しい校風を作ろうと生徒と教職員で頑張っています。本校では拠点校として、毎年大学院の教授陣にもご協力をいただいで、授業研究を進めております。教科の枠組みを越えた小グループによる公開授業を通し、日々の実践の中で教師の力量を向上させるとともに、授業づくりの工夫を研究しています。この取組も3年が経過し、何とか軌道にのってきたのではないかと考えています。これまで教職大学院にお世話になりながら、校内研究のしくみについて苦勞を重ねて、劇的に変化させて

こられた美浜中の諸先輩方の努力の賜物だと思います。今年研究推進を校務分掌としていただいた私は、このすばらしい取組を受け継ぐことになりました。この大変なプレッシャーをどう乗り越えていくか、ただラッキーなことに、そのヒントを教職大学院でいただくことができます。相談もできます。本校の取組をいかに向上させていくかを念頭に置きながら、教職大学院でのカンファレンスなどで研鑽をさせていただいているつもりです。自分なりに頑張りますので、よろしく願いいたします。

## 福井大学教育地域科学部

### 附属幼稚園公開研究会に参加して

#### 「好きな遊び」と「みんなの時間」のつながり

6月16日、附属幼稚園の公開保育に参加した。実は、昨年度に引き続き二度目の参加である。「小学校の先生がなぜ？」と聞かれるのだが、是非参加したいと思う理由がある。

一つ目の理由は、附属幼稚園が研究の柱としている「みんなの時間」にある。「みんなの時間」は「好きな遊び」の中で生まれたそれぞれの思いを一つの輪になって出し合い、みんなの思いとして共有する時間である。そのプロセスを通して、互いの考えを認め合い、次の遊びへとみんなの思いをつなげていくのである。「遊びの中で困ったことはないですか。」という教師の呼びかけに対し、それぞれが感じたことを出し合うが、それに対する答えもまた、自分たちの中から見つけ出そうとしている。「好きな遊び」から「みんなの時間」へ、そして、また次の「好きな遊び」へと子ども達の意識が繋がっていくのである。この「みんなの時間」は、小学校でも是非取り入れた学習活動である。

二つ目の理由は、研究会の持ち方である。公開保育の後でもたれた学年別意見交換会では、指導の在り

#### スクールリーダー養成コース2年／豊小学校 中谷 幸子

方について具体的な感想や質問が多く出された。小グループごとにファシリテーターがいて、これまでの活動についていろいろな補足説明がなされ、大変参考になった。そして、午後には、テーマ別の分科会がもたれた。私は、「小学校につなぐ保育」という分科会に参加したが、はじめに、助言者の先生からの問題提起がなされ、その後、テーマを絞って意見交換が行われた。それにより、先の学年別意見交換会とは、別の視点からの情報交換が可能となった。このような分科会のもち方も大変参考になった。ここに、公開保育をゴールとするのではなく、附属幼稚園の今後の研究に生かそうとする意欲を感じるのである。



小グループに分かれての情報交換会

# 日本教育方法学会 第48回大会のご案内

2012年10月5～7日、福井大学文京キャンパスにて、日本教育方法学会第48回大会が開催されます。日本教育方法学会は、戦後の授業研究運動を背景に1964年に設立した学会で、教育方法（教育内容を含む）全般にわたる研究の発展と普及をはかり、相互の連絡と協力を促進することを目的としています。詳しい情報については、学会ホームページ（<http://www.nasem.jp/>）をご覧ください。

**シンポジウム** 2012年10月6日（土）15:50～18:20

## 教育実践研究の持続可能性を問う

コーディネーター・司会者：寺岡英男（福井大学）・臼井嘉一（国士舘大学）

提案者：松下佳代（京都大学）・高木展郎（横浜国立大学）・八田幸恵（福井大学）

**課題研究Ⅰ** 2012年10月6日（土）9:15～11:15

### 教職スタンダードの設定と教員養成教育の充実

#### —「教職実践演習」の実施に向けて—

コーディネーター・司会者：井ノ口淳三（追手門学院大学）・山崎準二（東洋大学）

提案者：佐久間亜紀（大東文化大学）・遠藤貴広（福井大学）・三橋謙一郎（徳島文理大学）

**課題研究Ⅱ** 2012年10月6日（土）9:15～11:15

### 授業における発達障害児の指導

#### —教科指導の課題を問う—

コーディネーター・司会者：新井英靖（茨城大学）・湯浅恭正（大阪市立大学）

提案者：長谷川順一（香川大学）・原田大介（福岡女学院大学）・宮本郷子（大阪府内小学校）

**課題研究Ⅲ** 2012年10月6日（土）13:15～15:15

### 学級における集団と学び

#### —その今日的課題—

コーディネーター・司会者：阿部昇（秋田大学）・久田敏彦（大阪教育大学）

提案者：折出健二（愛知教育大学）・川地亜弥子（神戸大学）・志村廣明（中部大学）

**課題研究Ⅳ** 2012年10月7日（日）13:15～15:15

### 教育方法学の学問的固有性とは何か

#### —教育方法学において「理論」とは何か—

コーディネーター：中野和光（美作大学）・的場正美（名古屋大学）

司会者：梅原利夫（和光大学）・的場正美（名古屋大学）

提案者：秋田喜代美（東京大学）・柴田好章（名古屋大学）・中野和光（美作大学）



平成25年度

# 入学生募集

## 【募集人員】

スクールリーダー養成コース 15名  
 修業年限 原則2年  
 授与学位 教職修士  
 (専門職)

### 【このような先生にお勧めします】

- ① 専門職としての高度な知識・技能を身に付けたい
- ② 「新たな学び」が展開できる  
実践的指導力を高めたい
- ③ ミドルリーダーとしてのマネジメント力を含む  
総合的な教師力を鍛えたい
- ④ 時代の要請に応える学校づくりに参画したい



写真:スクールリーダー院生がポスターセッションで研究成果を発表している場面

## 【特色】

- ① 学校に勤めながら現職のままです。大学には、月1回(主に土曜日)のカンファレンスと夏季・冬季休業中に3日×4回～5回の集中講座に出席する程度に抑え、仕事との両立に配慮したカリキュラムとなっています。
- ② 学校の抱える課題が、そのまま大学院での研究テーマになります。現在の仕事の延長線上に研究テーマがあることで、学びがそのまま実務に活かされます。
- ③ 大学教員が学校に出向き、学校と大学が協働して学校の抱える課題に取り組みます。(学校拠点方式)

出願期間	平成24年9月6日(木)～11日(火) 最終日17:00まで
ガイダンス	平成24年9月15日(土) 10:00～12:00 於:文京キャンパス総合研究棟V 6階
選抜期日	平成24年9月22日(土) 9:00-10:30 専門科目A 学校改革実践研究の基礎 11:00-12:30 専門科目B 教育実践の分析 13:30- 口述試験 於:文京キャンパス総合研究棟V
合格者発表	平成24年10月2日(火) 10:00～
入学手続き	平成24年12月10日(月)～13日(木)

【注】入試は、教育関係資料をもとにこれまでの実践や今後の取組等を問うものが中心です。入試のための特別な対策や準備は必要ありません。

【アクセス】 入試情報は、本学HP(<http://www.u-fukui.ac.jp/>)から  
 教職大学院情報は、教職大学院HP(<http://www.fu-edu.net/>)から

## Schedule

8/20 mon - 8/22 wed 夏の集中講座(3a)  
 9/22 sat 大学院入試(第1次)

8/23 thu - 8/25 sat 夏の集中講座(3b)  
 10/20 sat 合同カンファレンス(9:30-12:30)

### 【編集後記】

新年度が始まって早4か月、1学期の学校生活はいかがでしたか。教職大学院の院生の皆さんもカンファレンスやラウンドテーブル、自校での日々の教育活動等を通して、得難い出会いと体験、そして学びを積み上げてこられたようです。夏休みは、心身をリフレッシュしていただくとともに、これまでの展開をじっくり振り返りながら、より充実した学校生活の再開につなげる充電期間でありたいと願っております。(津田由起枝)

教職大学院Newsletter No.45  
 2012.07.23発行  
 2012.07.23印刷

編集・発行・印刷  
 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
 教職大学院Newsletter 編集委員会  
 〒910-8507 福井市文京3-9-1  
 dpdfukui@yahoo.co.jp